

琉球大学学術リポジトリ

中学生における級友からの評価による仲間関係自己効力の変化

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部附属教育実践総合センター 公開日: 2009-04-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 前原, 武子, Maehara, Takeko メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/9709

中学生における級友からの評価による仲間関係自己効力の変化

前原 武子*

Change in Self-Perceived Intepersonal Competence as a Effect of Peer Evaluation feedback on Junior High School Students

MAEHARA Takeko

子どもの中には、積極的に、親和的に友人関係を成立し維持することが容易にできる子どもとできない子どもがいる。その個人差は、認知されたコンピテンス (Wheeler and Ladd, 1982) や、社会的スキル (佐藤, 1996), 対人交渉方略 (山岸, 1998), 対人関係における感情 (Asher, Hymel, and Renshaw, 1984) など、さまざまな方向から検討が重ねられてきた。そして、社会的スキルの訓練を通して対人関係の改善を図る研究もなされてきた。本研究は、対人関係の改善を期待して対人関係自己効力を高めることを試みようとするものである。

Bandura (1977) は、自己効力 (self-efficacy) が特定行動に対する努力の程度、持続性、あるいは課題の選択などに影響するすることを理論化した。それは多くの研究によって支持されてきた (Bandura, 1995)。動機づけや学業達成だけでなく、さらにその自己効力期待はストレス、不安、抑うつなどの情動的な状態へも影響を与えることが検証されている (坂野・鈴木・前田・東條, 1987)。しかしながら、対人関係の自己効力に焦点をあてた研究はきわめて少ない。その中で、小石 (1998) は、仲間関係の自己効力感を高めるための実験的操作を導入し、仲間関係能力の自己認知に変化が見られるかど

うか検討した。彼は、小学校2年生および5年生に学級仲間の「良いところさがし」を課し、その結果を一覧表にしてフィードバックした。その結果として、操作の効果は2年生に見られないこと、一方5年生では、仲間関係の自己効力感、認知された社会的スキル、ソシオメトリック地位ともに大きな変化が見られたことを報告している。この研究は統制条件を用意していない点に大きな欠点を含んでいるものの、教師が日常的に行なう学級指導に利用可能な貴重な情報を提供するものである。

学級成員が相互の良さを認識し、それを伝達し合うという手続きは、各人にとっては学級仲間から肯定的な評価を受け取ることである。それは、言語的な外的報酬として、自己効力感や自己決定感を高める情動的機能をもつ。Deci (1975) の認知的評価理論 (cognitive evaluation theory) によれば、物質的な外的報酬は内発的動機づけの低下につながるおそれがあるが、言語的な外的報酬は制御的側面というより情動的側面として機能する。特に日本社会では米国に比べて教師や親は子どもを「ほめる」ことが少ない (東, 1994) 状況を想像すると、教師が学級経営において、級友間の「ほめる・ほめられる」経験を積極的に導入することによっ

*琉球大学教育学部

て、報酬の制御的側面より情動的側面が大きく機能し、子どもの対人関係の自己効力感を高めることにつながるものと仮定され、ひいては対人関係能力を高めることが期待される。

本研究は、小石（1989）の追試的研究にとどまらず、新たな発展を目指している。その1つは、彼が報告する自己効力感の変化が偶然であることを棄却するために、統制条件を用意することである。第2に、彼の研究計画ではフィードバック後の自己効力感変化の持続が確認されたのは、わずか3日後であったため、せめて1週間の間隔を用意する。第3に、彼はフィードバックの個人差の問題を明らかにしていない。他者からの評価を用いたフィードバック効果における個人差として自尊感情のレベルに注目することの必要性は、すでに指摘されてきた（中村、1978）。他者からの肯定的評価という教育的介入の必要性は、すべての生徒様に求められるという場合もあるが、特に自尊感情の低い生徒に求められる。そこで本研究は、対人的自己効力感を支える自尊感情を取り上げて、その個人差によるフィードバック効果の違いを検討する。自尊感情とは全体としての自己に対する肯定感情を意味する。対人関係自己効力を高めるための特別の介入が、自尊感情の高い生徒にも低い生徒にも一様に効果をもつのかどうか分析検討する。第4に、小石（1998）は小学校5年生で仮説が検証されたことを報告しているが、性差の検討を行っていない。対人関係のありかたに性差があることは多くの先行研究が報告するところである（松尾・新井、1998；渡部、1995；山岸、1998）。最後に、小学生で見出した小石（1989）の結果が中学生にも期待できるかどうか検討する。樽木（1990）によれば、仲間からの肯定的評価のフィードバックが中学生の自己評価に影響するという。その結果から、中学生でも「ほめる・ほめられる」経験が対人効力感を高める効果をもつものと推察される。

方 法

被験者 中学校2校の2年生222名と1年生31

名の計253名。そのうち2年生37名（1クラス）が任意に統制群として選ばれた。

実験条件 教室での「ほめる・ほめられ経験」を実験群、その介入を行わない群を統制群とする。

従属変数測定尺度

①仲間関係自己効力感尺度：小石（1998）による仲間関係への効力感尺度11項目（表1に示す）。回答は「絶対できる」、「少しできる」、「あまりできない」、「全くできない」の4点評定で行なわれた。

②自己価値尺度：Harter（1982）による認知されたコンピテンス尺度の下位尺度「自己価値」の項目を参考に作成した8項目（表2に示す）。「いつもそう」、「時々そう」、「時々ちがう」、「まったくちがう」の4点評定による。Harter（1982）は、「自尊感情」という用語でなく、自尊感情理論とWhite（1959）のコンピテンス動機づけ理論をもとに「認知されたコンピテンスperceived competence」という用語を使用した。それは自尊感情ときわめて類似し

表1 仲間関係自己効力感尺度

1. あなたはクラスの誰にでも、自分から話しかけることができますか。
2. あなたは、たくさんの友達が遊んでいるところに入れてもらうことができますか。
3. あなたは、何かグループを作らなければならないとき、友達に「一緒にグループになろう」ということができますか。
4. あなたは、クラスのあまり仲良くない人と、楽しく遊ぶことができますか。
5. あなたは、友達としたい遊びが違っていたら、友達がしたい遊びにゆずる自信がありますか。
6. あなたは休み時間に、友達と楽しく過ごすことができますか。
7. あなたは給食時間に、仲良しの友達がいないグループでも、みんなと楽しく食事をすることができますか。
8. あなたは忘れ物をして、困っている友達がいたら、自分のものを貸してあげることができますか。
9. あなたは友達の気持ちを考えて、行動したり、発言をしたりできますか。
10. あなたは友達に手伝ってほしいと思ったとき、「手伝って」と友達に頼むことができますか。
11. あなたは、クラスで困っている友達や泣いている友達をなぐさめたり、助けてあげる自信がありますか。

表2 自己価値尺度項目

1. 自分のことが好きである。
2. 自分の毎日の過ごし方は、気に入っている。
3. 自分がいやになることがある。(－)
4. 今とは違った自分になりたいと思う。(－)
5. 今の自分にとっても満足している。
6. 自分のような人が好きである。
7. 自分のしていることを考えるといらだつ時がある。(－)
8. 自分で自分のことをほめてあげる。

(－)は逆転

た概念である。児童期には自尊感情、すなわち自己価値を土台に、対人的側面や、知的側面、運動的側面、容貌・身体的側面、あるいは規範的行動側面など領域固有の自己効力感が分化することが仮定され、尺度が構成されたのであった。

手続き

第1段階：すべての被験者を対象に、①、②の質問紙を実施した。

第2段階：統制群を除く被験者を対象に、第1段階終了直後に、学級全員の名前が記入された用紙を配布し、学級の全員について良いと思うところをできるだけたくさん(最低でも必ず1つは)記入するよう求めた。記入者は無記名であった。

第3段階：約1週間後、第2段階で明らかにされた回答結果をフィードバックした。良いところとして記入されたことから、各人3～4こ用意した一覧表を配布した。また、一人につき6～12こを当該の子どもに配布した。

第4段階：第3段階終了後、質問紙①を実施した。統制群では、フィードバックなしに実施されたことになる。

第5段階：フィードバック終了後約1週間経て、統制群以外の被験者に、質問紙①を再度実施した。統制群にも実験群と同一手続きをとる予定であったが、一部被験者に否定的発

言(同じ調査をただ繰り返す意味が理解できない)があったことから、再調査に躊躇し、結局断念した。

手続きは、すべて担任教師によって行なわれた。

結 果

図1と2は、仲間関係自己効力感得点を条件別、調査時期別、性別に示したものである。統制群への3度目の調査を断念したことから、分散分析によらず、t検定による検討を行なった。まず、条件間のt検定を男女別、調査時期別に行なったところ、男女とも、また処遇前も後も条件間で対人効力感得点に有意差はなかった。次に、条件別の分析を行なった。統制群の処遇前と後の間の差について繰り返しのあるt検定を行なった結果、男女ともに有意差はなかった。実験群においては、性による違いが見られ、男子にあつては、フィードバック処遇前と処遇1週間後の間($t=4.78, p<.01$)および処遇直後と1週間後の間($t=3.61, p<.01$)に有意差が見られた。一方、女子にあつては、処遇前と直

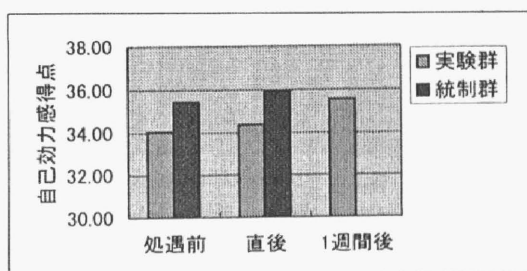


図1 仲間関係自己効力感得点 (男子)

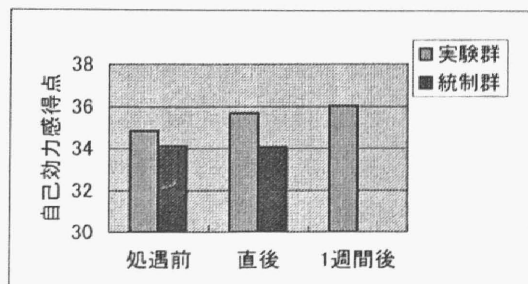


図2 仲間関係自己効力感得点 (女子)

後の間 ($t=2.51, p<.05$) に有意差があり、処遇前と1週間後との間 ($t=3.21, p<.01$) にも有意差があった。

次に自尊感情レベルの違いをみるために自己価値得点の度数分布表をもとに実験群を3群に分類した。自己価値得点には性差が見られたため(男子: 16.89, 女子14.24, $t=4.85, p<.001$), 性別に群分けを行なった。図3と4は自己価値レベル別対人関係自己効力感得点を性別、調査時期別に示したものである。レベル間の差についてt検定を行なったところ、男子においては、高群で高い得点が見られるが、いずれの調査時期においてもレベル間に有意差は見られなかった。女子においては、いずれの調査時期においても、自尊感情高群が中群より有意に高い得点を示した(処遇前: $F=7.87, p<.01, L<H: t=3.39, p<.01, M<H: t=3.95, p<.01$; 処遇直後: $F=3.69, p<.05, M<H, t=3.09, p<.05$; 処遇一週間後: $L<H: t=3.14, p<.05, M<H, t=3.75, p<.01$)。しかしレベル別に自己効力感得点を見ると、調査時期間で違いが予想されるところから、自己価値レベル別および性別

に、調査時期間の対人関係自己効力得点差を繰り返しのあるt検定を行なった。その結果、男子においては、自己価値低レベル群では処遇前と処遇1週間後との間($t=2.31, p<.05$)にだけ有意差が見られるが、中群と高群では処遇前と処遇1週間後の間(中群: $t=3.01, p<.01$; 高群: $t=3.05, p<.01$)だけでなく、処遇直後と処遇1週間後との間(中群: $t=2.55, p<.05$; 高群: $t=2.70, p<.05$)にも有意差があった。いずれのレベル群とも処遇前と処遇直後との間には有意差は見られなかった。一方、女子においては、低レベル群だけで、処遇前と直後の間 ($t=2.25, p<.05$), また処遇前と処遇1週間後との間($t=2.32, p<.05$)に有意差が見られた。

考 察

本研究の主な目的は、級友からの肯定的評価をフィードバックするという教師による処遇が中学生の対人関係自己効力感を高める効果があること、その効果が性の違いおよび自尊感情レベルの個人差によって違いがあることを確認することであった。得られた結果は、男女ともにフィードバックの効果があること、またその効果は自尊感情レベルの個人差によって異なるという興味ある特徴を示すものであった。

級友からの肯定的評価情報を教師から受け取った実験群の生徒は、男女ともに、級友との対人関係自己効力感を高めた。統制群との比較検討の結果からは、男女ともにフィードバックの効果を確認することはできなかったが、統制群では異なる調査時期間で自己効力感に変化はないものの、実験群では、男女ともに、フィードバック前よりフィードバック後の1週間経過後に対人関係効力感の向上を示したのである。中学生は、級友が自分の「良さ」を知っていることを知らされた後、自分から話しかけたり、グループに入れたり入れてもらったというような、良好な友人関係を成立・維持することができるという自信を高めたのである。本研究は、小石(1998)が対象とした小学校高学年生だけでなく、中学生にあっても、級友が自分の良いとこ

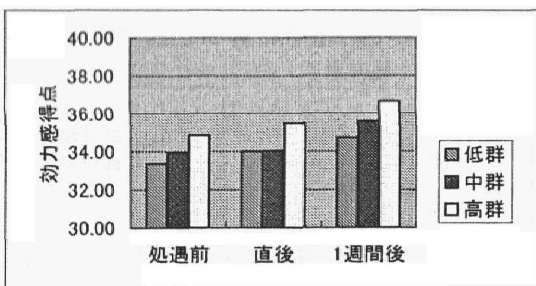


図3 自尊感情レベル別仲間関係的効力感得点 (男子)

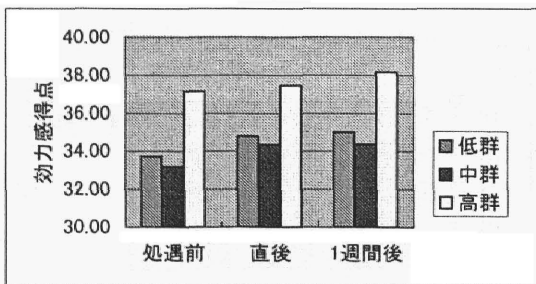


図4 自尊感情レベル別仲間関係的効力感得点 (女子)

ろを分かってくれているという認識が級友との関係における自己効力感に効果的に作用することを見出したことになる。

また、そのフィードバックの効果は、自尊感情のレベルによって異なることも明らかにされた。樽木(1992)は中学生を対象に、ゲスフーテストによる肯定的情報を教師から伝達するという手続きを採用し、自尊感情の高群と低群の違いを検討した。その結果、自尊感情の低群だけで自信度の上昇が認められたという。彼は性差を検討していないが、本研究は、自尊感情の低群の効果が男女ともにあることを見出し、さらに男子において、自尊感情レベルにかかわらず、フィードバック1週間後の対人効力感の変化を確認したことになる。女子の場合、実験処遇の前から、自尊感情の高い者の対人効力感が高く、その特徴は、処遇後にも変化することはなかった。したがって自尊感情の高い者にフィードバック効果がなかったことは天井効果によるものと思われる。しかし、自尊感情中群がフィードバック効果を示さなかった結果は不明である。

他者からの評価と自尊感情レベルとの関連に関して、これまで自尊感情説と認知的斉合説の2つの立場から説明が試みられている(蘭, 1986; Jones, 1973)。自尊感情説によれば、人は自己評価を高めようとする欲求をもっている。自尊感情の低い人は、高い人に比べて承認欲求が強いと仮定され、他者からの肯定的評価情報に受容的に反応し好意的感情を抱くのに対し、否定的評価情報に対して非好意的感情を抱くことになるという。一方、認知的斉合説によれば、自尊感情の低い人は、他者からの肯定的評価が自己認知と斉合しないので、非好意的感情を抱くことになり、逆に否定的評価を与える人に対しては好意的感情を抱くことになると解釈される。そのいずれの説も支持される結果が報告されているが、蘭(1990)のレビューによれば、自尊感情説を支持する研究が多いという。本研究結果も、男女ともに自尊感情説を支持するものといえよう。

本研究結果は、自尊感情の低い生徒への「ほめる・ほめられる」経験の教育的介入効果の可

能性を示唆するものであるが、今後に残される課題も多い。まず、実験計画の不備である。2(実験群・統制群)×3(調査時期)の計画を予定したものの、繰り返しの測定に対して一部被験者が消極的反応を示したことから、特に統制群における再度の調査を断念した。その結果、分析方法に不満を残すことになった。また、本研究では、個人の対人効力感の変化に焦点が置かれたが、さらに学級全体の雰囲気にも望ましい変化が起きるものと予想される。今後、フィードバックによって個人の対人効力感の変化と連動した学級風土の変化が見られるかどうか検討する必要がある。さらに、対人的自己効力感と負の相関関係にある対人不安(松尾・新井, 1998)の強い生徒に対しても本手続きのような介入の効果があるかどうか、今後検討する必要がある。最後に、対人関係自己効力の変化に伴って、実際の対人関係スキルにも変化が見られるかどうか他者からの客観的評価を導入して吟味する必要がある。今後の検討に残される。

引用文献

- ①Ashuer, S.H. and Hymel, S., & Renshaw, P.D. 1984 Loneliness in children. *Child Development*, 55, 1456-1464.
- ②東洋 1994 日本人のしつけと教育 東京大学出版会
- ③蘭 千壽 1986 対人魅力 対人行動学研究会(編) 対人行動の心理学 誠心書房
- ④蘭 千壽 1990 パーソナル・ポジティブティの心理学 北大路書房
- ⑤Bandura, A. 1977 Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, 84, 191-215.
- ⑥Bandura, A. 1995 Self-efficacy in changing societies. Cambridge university Press

(本明寛・野口京子監訳 1997 激動社会の中の自己効力 金子書房)

⑦Deci,E.L. 1975 Intrinsic motivation. Prentice Hall, N.Y.(安藤延男・石田梅雄訳 1980 内発的動機づけ 実験社会心理学的アプローチ 誠信書房)

⑧Harter, S. 1982 The perceived competence scale for children. Child Development, 53, 87-97.

⑨Jones,S.C. 1973 Self and interpersonal evaluation : Esteem theories versus consistency theories. Psychological Bulletin, 79, 185-199.

⑩松尾直博・新井邦二郎 1998 児童の対人不安傾向と公的自己意識, 対人的自己効力感との関係 教育心理学研究 46,21-30.

⑪小石寛文 1998 学級集団における社会的スキル訓練プログラム作成の試み 平成8, 9年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書

⑫中村陽吉 1978 対人場面の効果 末永俊郎(編) 講座社会心理学2 集団行動 東京大学出版会

⑬坂野雄二・鈴木友美・前田基成・東條光彦 1987 主張行動の形成に及ぼすself-efficacy向

上操作の効果 千葉大学教育相談研究センター年報, 4, 161-185.

⑭佐藤正二 1996 子どもの社会的訓練 行動科学, 34, 11-22.

⑮樽木靖夫 1992 中学生の自己評価に及ぼす担任教師によるフィードバックの効果 教育心理学研究, 40,130-137.

⑯Wheeler, V.A. and Ladd,G.W. 1982 Assessment of children's self-efficacy for social interactions with peers. Developmental Psychology, 18,795-805.

⑰White, R.W. 1959 Motivation reconsidered:The concept of competence. Psychological Review, 66, 297-333.

⑱渡部玲二郎 1995 児童における対人交渉方略の発達 社会的情報処理と対人交渉方略の関連性 教育心理学研究, 41, 452-461。

⑲山岸明子 1998 小・中学生における対人交渉方略の発達及び適応感との関連 性差を中心に 教育心理学研究, 46, 163-172。

資料収集にあたり、山内柳弦氏に多大な協力をいただきました。また、学級担任および生徒諸氏には度重なる実験に忍耐強くご協力いただきました。心から感謝申し上げます。